昭和45年創刊　平成27年5月1日発行（毎月一回一日発行）俳句雑誌　沖　第46巻第5号

沖

5
2015

俳句雑誌［おき］

走り尽く

能村　研三

活版の印字の重み黄砂降る

一艇を坦ぐ春嶺仰ぎ見て

一睡のあとは春星うるみたる

朧夜をブルートレイン走り尽く

書斎訪問

先日、俳句総合誌の企画で「書斎訪問」という取材があった。こうした企画は普段から整理のおぼつかない多忙な俳人にとっては悩ましいものである。編集者からは、「ありのままでも良いですよ」と言われたものの、ある程度の書庫と書棚の整理をすることにした。幸い昨年の夏から書斎の大幅な改造に着手し、畳の和室において座卓で仕事をしていたものを全てフローリングにした。私の体格にあわせ特別に誂えた杉の木の座卓も、知り合いの大工に相談したところ、これにデザインが合うような脚をつけてくれたので、これを再利用している。

多忙を極めていると、書棚も横積みの本が幾重にも重なり、結局は積読の状況になり何がどこにあるか判らないままになってしまう。

我が家には、父の蔵書のための書

PDF= 俳誌の salon

助手席に粗畳みせる春の服

陽炎や仕来り違ふ向かふ岸

口中におぼろをまとふ湯葉づくし

使はずの文房四宝黄砂降る

家人とは別の酒酌む花の夜

走り根に日の斑が揺らぐ愛鳥日

庫が二カ所あり、これに加えて沖のバックナンバーをしまっておく専用書庫がある。これも次女の麻衣が時間をみつけては、バックナンバーの整理をしてくれたので、古い号の「沖」での調べものがし易くなった。

以前林翔先生の書斎を訪ねた時、先生の几帳面さもあって、作家別に句集、著作が纏められ、これも五十音順に並べてあるのを拝見したことがあり、このように書庫は整理していくものだと教えていただいたことを覚えている。

蔵書というものも、ただ仕舞っておくだけでは、何の意味もなさず空間の無駄遣いになってしまうことは明らかなことなのだが、これが日常的にスムーズに出来ないことが悩ましいことである。

今回の書斎訪問の取材は、書庫を整理する良いきっかけになった。これから少しずつ時間をかけて林翔先生のような書斎整理をしていきたいと思っている。

能村　研三

PDF= 俳誌の salon

蒼茫集

愚直に

千田　敬

歳時記を愚直に繰りて余寒なほ
啓蟄や釦ひとつをはづしをり
桟橋は見送るところ春夕焼
木の芽山仰ぐといふは背筋伸び（つくば吟行　二句）
科学とは地の塩なれど芽は花に
而して宇宙遊泳春の夢

歩幅

辻　美奈子

踏青のこころ鎮めの歩幅かな
探梅のすこし不便はよかりけり
雨でなく雪でなくひとひらの水
啓蟄の石ころ目覚めたがるなり
桃咲いて誕生会のナポリタン
このところ涙湧かずよ初桜

力づく

安居正浩

流氷を押す流氷の力づく
もやもやが集まり春の山になる
園児来て土筆の国はカーニバル
鐘楼に時間の眠る春の昼
春風と湖ある町を故郷とす
旅に出て子は強くなる春休

三寒四温

菅谷たけし

湯気立てて人は淋しさ飼ひ慣らす
菰丈をはみ出ず寒の白牡丹

PDF= 俳誌の salon

三寒四温身の丈徐々に縮みけり
さざなみに沼明け渡し鴨帰る
芽起しの雨に浮きくる真鯉かな
ひとの世の喜怒を遠くに桃の花

宇宙服

細川洋子

啓蟄や幾らか緩む釘の穴
優柔を竭(つく)し北窓ひらきけり
桃咲くや年を重ねるほど御洒落
芽起しの雨(つくばにて 三句)ロケットの聳え立つ
宇宙服もこもこ厚し山笑ふ
軒裏の竹組み美しき雛の家

塩の道

矢崎すみ子

鳥帰る地に塩の道絹の道
鳥声の靄にくぐもる牧開き
竜天に登る硯の龍の彫
動かざる山や五百枝に風光る
鉄瓶に湯の沸いてゐる入彼岸
直線のうねりの松や雁帰る

ビバルディ

内山照久

暗がりの艶めき亀の鳴く気配
春寒し歩道の禁煙マークかな
針穴に糸の通らぬ余寒かな
菜の花の向かふは空と海ばかり
茹であがる春菜のみどりビバルディ
春雷や耳こそばゆき褒めことば

こごみ歩き

千田百里

小町忌の掌にひんやりと電子辞書
蝶にこゑありとせばこのせせらぎか
黄楊の櫛もて春愁をほぐしけり
鷹鳩と化し油断も隙もある夫婦
ロケット(つくば吟行 二句)待機竜天に登るため
春興や古民家こごみ歩きして

PDF= 俳誌の salon

木の芽雨

甲州千草

箸要らぬもの買ひ春に合流す
木の芽雨団体切符配らんと
涅槃西風ほうとロケット一周り
木の芽雨こども電車の覆はれて
雛覗く上り框に手をついて
抱卵期防犯カメラ増ゆるなり

時刻表

楠原幹子

家になき大黒柱建国日
冴返る紙ふんだん使ひ捨て
透明な傘に音なく春の雪
魚は氷に分厚き時刻表を買ひ
名刺にある半農半漁あたたかし
達観か諦観か茎立ちにけり

連翹忌

大畑善昭

痩せ猫の恋敵には負けてゐず
春荒れの三日つづきし後の星
帰りなんいざ白鳥の縞羅の列
何にでも使ふ両の手連翹忌
春の鳶輪の中に的しぼり切り
見て通るのみ梟の巣のある木

春待つ指

林昭太郎

パレットに春待つ指を通しけり
春ショールひらりと船の人となる
囀や両手広げて干すシーツ
湯上りのやうな月揚げ猫の恋
マヨネーズぱふんと終る春の昼
ピアノにも鍵といふもの桜冷

吊し雛

上谷昌憲

干物焼く匂ただよふ吊し雛
吊し雛夜は引力に戯れてをり
昨日とは違ふ潮騒吊し雛
ホチキスに針を装填日脚伸ぶ
下町の目抜通りを初つばめ
おざなりの現場検証鳥雲に

PDF= 俳誌の salon

桜咲きさう　遠藤真砂明

たつぷりと生きて枸杞飯日和かな
黒北風の海の歳月東北忌
桜咲きさう心音のあふれさう
地球儀の先に波音春休み
きつと見据ゑてきさらぎの男星
晩年の花に青空ごころかな

浄め塩　藤原照子

直系の果つや深雪の家守り
消息は施設へとのみ梅一輪
読書とふ美味しい時間春の雪
自らへ浄め塩ふり梅二月
断捨離の一歩春日の小抽斗
春霞突きつくばエクスプレス号

田打ち桜　森岡正作

木洩れ日の一つ弾けて鳥の恋
七人の敵何処にゐる目借時
農具研ぐ田打ち桜に急かされて
フランスへ留学雛を置き去りに
芽吹山太き谺を返しけり
抑留を語らず逝けりミモザ咲く

夢継ぎ足して　樋口英子

八ヶ岳の風不揃ひに春来つつあり
冬木の傷撫でて己れを律しけり
冬の夜の夢継ぎ足して母に逢ふ
ストーブを囲み木椅子の客となる
話題また昭和に戻る炬燵かな
青き踏むどこにも地雷なき青さ

さざ波のごと　秋葉雅治

余寒なほ利休鼠の湖の面
寄せ返るさざ波のごと春愁は
大鳥居の立つ瀬を洗ひ彼岸潮
国道に隣る村道雪解遅々
水垢離の僧の浴身冴返る
初ざくらひた待つ日々の自愛かな

PDF= 俳誌の salon

飛翔ごころ　望月晴美

春光や飛翔ごころに階のぼる
蛇穴を出づ厄介な長さもて
春一番ハンドル急に意志持てり
筑波嶺の稜線やさし芽吹き時
春山家大黒柱親しくて
しかと巣を抱く裸木の枝ぢから

人の世　宮内とし子

人の世にサイエンスあり梅真白
寝返れば宇宙まで行く春の夢
古民家に座す春愁の置きどころ
東風吹くや終着駅は知らぬ町
網元の土間開け放ち吊し雛
夫植ゑし槙は大樹に月おぼろ

百合鷗　鈴木良戈

夕風にそぞろ川波百合鷗
盆梅や朝日に凝りし紅の輝り
柊挿す低き門柱星明かり
植木市三人寄りて値を定め
訃の知らせ受けたる朝の雪ひらひら（斉藤悼歌氏訃報（井原美鳥さんより））
鰊焼く香り夜風にまぎれをり

新雪　河口仁志

新雪を踏み月面にゐるごとし
狐火に憑かれ愚老の独り言
雪解川越えて富山の薬売
目つむれば風瞠けば野火猛る
鳥帰る家庭菜園十坪ほど
地球とは宇宙の孤島春の月

口跡　渕上千津

父似母似の二人遺りぬ雛の宵
月おぼろ老けてもオーラ褪せぬ人
慰霊堂三月十日の雨けぶる
亡き人の口跡をふと春夕焼
わが知らぬライン飛び交ふ春の闇
人頼まず時を待ちゐる余寒かな

PDF= 俳誌の salon

潮鳴集

神々

荒井千瑳子

参道の真中神ゆく二月
青き踏む古事記の神の一歩かな
約束のあるかに街へ三月来
飛び立てぬ展示ロケット日の永し
春うらら手力男立つゆるぎ石

春風

平松うさぎ

料亭の一椀に発つ春風
春風に少女そのまま印象派
智の神の智を開かむと春の雨
福島忌月は朧を深めけり
春雷の一閃巨船の腹浮かぶ

鳥の恋

大沢美智子

濤音のひときは高し立雛
ひかり降る沖の潮目や菜の花忌
福耳の飛鳥大仏桃の花
むらさきに筑波の双耳雛納
太陽を造るてふ夢鳥の恋

児は親思ふ

中田とも子

二月礼者引き摺りさうな紙袋
気に掛かる地軸のずれや初ひばり
秘すれども児は親思ふ桃の花
吾が雛男の子ばかりに見詰めらる
春寒や原発といふ異界の火

PDF= 俳誌の salon

沖作品

能村研三 選

立春大吉一刀彫の黒光り　神奈川　小林　和世

鳰一羽湖むらさきに暮れにけり

鳰浮きて己が立ち居を確かむる

風花や円空仏の彫に笑み

立春のその一木のあすならう

湧水の春の光を掬ひけり　千葉　竹内タカミ

ひとつづつ香りを聞きて梅五輪

本陣の大梁あらは春寒し

白梅や大き庭下駄並べあり

春雷や母に反抗せしことも

啓蟄やペンと手帳と好奇心　市川市　本池美佐子

白魚飯頬張つて地の人となる

蘖や朽ちゆく幹の叫びとも

梅万蕾生くる力の漲れり

リユックにはおむすび二つ下萌ゆる

黙といふ饒舌もあり夜の梅　千葉　岡　真紗子

草の芽や敗者復活する兆し

梅の名は五郎十郎虎御前

めらめらと地を迫り来る野焼の火

鯰五郎料る女将の赤襷　福島　佐川三枝子

雪撥ねて総身震はす雄松かな

凍星や撃ちてし止まむと征きし兄

陰日向きは立つ谿や雪解どき

峡の灯の二つ三つ四つ初朧

料亭の裏階段や恋雀

雪解急海峡隔て佳き便り　賴田　幸子

一人の世夫の年越え二月逝く

待春や足裏のちとむづ痒き

雛の間に吾が来し方のつくづくと

蓮如忌や今にして沁む御文章

PDF= 俳誌の salon

沖作品15句選評

*

能村研三

鳰一羽湖むらさきに暮れにけり　小林　和世

鳰は湖沼や公園の池などに棲み、例えば琵琶湖は鳰の湖などと称され親しまれている。しかしめったに地上には上がらず、水に潜っては魚や小海老、昆虫などを捕食している。目まぐるしく浮き沈みする様を眺めていても、潜った鳰が次にすぐ浮いて来るとは限らないし、長く潜っているものや直に浮いて来るものなど様々である。また浮いて来る場所も想定外の場所に出てくることもある。また「鳰鳥の」は「葛飾」にかかる枕詞で万葉集などにも詠まれている。作者は夕暮れ時紫色に暮れかかる湖にいて、鳰鳥が何度も潜っては浮き上がる瞬間を心ゆくまで観察していた。

湧水の春の光を掬ひをり　竹内タカミ

湧水というと富士山麓の柿田川や忍野八海などが有名だが、いずれも富士山の雪解け水が地下の溶岩の間で長い年月をかけて濾過され湧水となって噴出する。透き通った川の底から力強く砂を巻き上げて、まるで呼吸をしているかのように次々に水が湧いてくる。その湧き方は、湧水の息遣いを聞いた気分にもなる。その透明感はまるで春の光を掬い上げているようでもある。

啓蟄やペンと手帳と好奇心　本池美佐子

啓蟄は二十四節季の一つで三月六日頃にあたる。啓は「ひらく」、蟄は「土中で冬ごもりしている虫」を意味し、大地が暖まり冬眠していた虫が、春の訪れを感じ、穴から出てくる頃を言う。まだまだ寒い時期ではあるが、俳句を作る人にとっても待ちに待った吟行シーズン、ペンと手帳を携え、好奇心を大きく膨らませ出かけることにした。

黙といふ饒舌もあり夜の梅　岡　真紗子

この句は一句一章の句として解釈した。梅が咲く頃の夜は春とはいえ、まだ寒く梅もまた白々と冴えている。「夜の梅」というと和菓子の羊羹の名を思い出すが、この菓子の名も『古今集』の〈春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる〉から採ったらしい。闇の中に白く咲く梅の花は香を放ち闇をほんのりとした艶で包み込む。その梅の咲きようは静寂の中にも饒舌という賑やかさも垣間見ることが出来る。〈以下略〉

PDF= 俳誌の salon